

## 輸血終了後を含めた副作用発生状況

田崎萌、稲田直樹、岩切望美、金丸恭子、小山田栄子、坂元あい子、竹ノ内博之

宮崎大学医学部附属病院 輸血・細胞治療部

### 「はじめに」

当院では輸血副作用の全例報告に取り組んでいる。2011年までは輸血中に発生した副作用が報告の対象だったが、2012年より副作用報告体制の整備を行い、輸血開始24時間以内に発生した輸血副作用報告を開始した。新体制を開始して1年が経過し、輸血副作用発生状況を検討したので報告する。

### 「対象」

2012年5月から2013年4月の1年間に当院で日赤製剤(赤血球製剤 4004 バッグ、血漿製剤 1775 バッグ、血小板製剤 2127 バッグ)を使用した患者1679名のうち、医師により副作用レポートが提出されたものについて解析を行った。

### 「結果」

副作用発生患者割合は 5.3%だった。製剤別、輸血中/後の副作用発生割合は、赤血球製剤では輸血中が 47.8%、輸血後が52.2%、血漿製剤は輸血中が63.6%、輸血後が36.4%、血小板製剤は輸血中が 47.1%、輸血後が 52.9%だった。輸血開始から副作用の 95%が発生するまでの時間は、赤血球

製剤が 300 分、血小板製剤が 210 分だった。また輸血終了後に発生した副作用のうち輸血終了後 10 分以内に発生した副作用の割合は赤血球製剤で50%、血小板製剤で67%だった。全製剤では、輸血終了後 10 分以内に副作用の 61%が発生していた。しかし 6%は輸血終了から 6 時間以上経過した後に発生していた。

### 「考察」

今回、輸血副作用は輸血中だけでなく輸血後にも発生することが判明した。特に輸血終了後 10 分間には全体の 61%もの副作用が発生しており、終了後も 10 分間は患者観察を行うのが望ましいと考えられた。また、赤血球製剤は 300 分、血小板製剤は 210 分と製剤毎に副作用発生の時間差があることが示唆され、今後の患者観察や外来患者の指導の目安になると思われる。

連絡先 : moe0814@fc.miyazai-u.ac.jp